



東京大学 東洋文化研究所 要覽 1998



殷代刻辞牛肩胛骨

東京大学東洋文化研究所



6413042810

C3

45

1998

東京大学
東洋文化研究所
要覧

1998



東京大学東洋文化研究所



男子頭胸像
中国唐時代（8世紀）。
トルファン出土。大谷探検隊得來品。



馬像
中国唐時代（8世紀）。
トルファン出土。大谷探検隊得來品。



仏三尊埴（六朝造像埴）

中国6～7世紀。仏龕を4つ並べ、それぞれに仏三尊を表現する。



銀錠

中国後漢建和二年（148年）の銘をもつ。

重さは、174g。インゴットと見られ、当時の百両の1/8に相当する。



孫臯買冢券

中国（呉）時代。

孫臯が墓（冢墓）を作るため、一丘を購入したことを記す墓券。



I



II

戦国貨幣 I・II

Iの左四者は布錢、右一者は円錢。

主として布錢は中原の韓・魏・趙三国、円錢は陝西の秦国で用いられた。

IIは刀錢。主として河北の燕国や山東の斉国で用いられた。

上段右から二つめは王莽錢。



ダイバー写本

no.286

イスラームの宗教詩人ジョズーリー（西暦1456年没）が預言者ムハンマドを讃えた詩、『祝福の徴表と光明の煌めき』のマグリブ書体のアラビア語で書かれた19世紀の写本。



宋版『史記』

中国書の印刷は宋代に本格化した。現存する数少ない宋版の一。夏本紀の部分。



大方廣佛華嚴經 殘一卷
 存卷第四十一 東晉佛陀跋陀羅等譯 鎌倉時代中期刊本（春日版）
 折本全一帙一冊 全七十六折 各葉六行十七字 29 釐×11.7 釐



(伝)元 王振鵬 唐僧取经図冊(金葫蘆寺過火災山図)
元時代 14世紀
絹本墨画着色 34・5×27・7cm
兵庫・個人蔵

本画冊は、現在見られるような形に完成される以前の『西遊記』の原テキストのうち、北宋から金時代に遡ると思われる一本に基づいて、元代李郭派の山水表現を踏まえつつ絵画化した作品である。中国絵画史研究者はもちろん、中国文学研究者にも画期的な発見と評価されており、当研究所の田仲一成・戸田禎佑両教授（現名誉教授）による論文「『唐僧取经図冊』故事初探」「『唐僧取经図冊』の様式的検討」（『国華』1163号、1992年）がある。



瓦当「漢并天下」

「漢天下を并す」は、前二〇三年末に高祖劉邦が宿敵項羽を垓下に破ったことを祝う。



瓦当「千秋万歳」

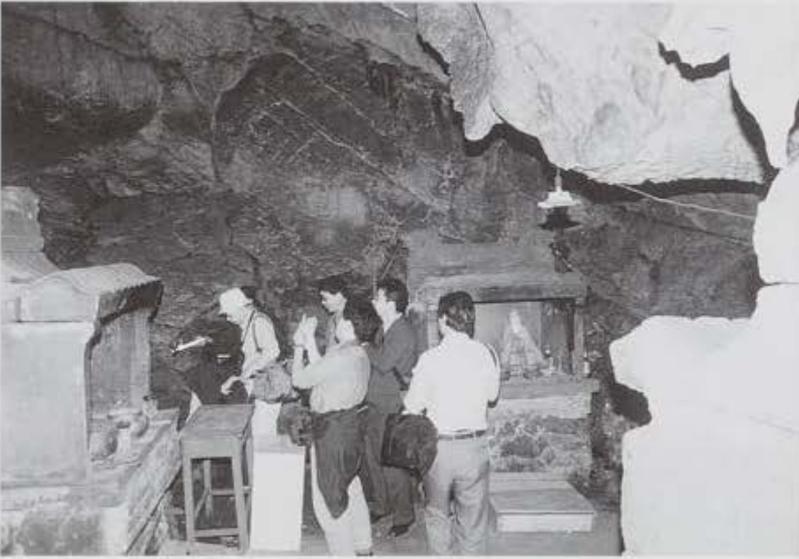
瓦当は軒丸瓦のこと。千秋は千年、万歳は万年。千年も万年もの長生きを祝う。漢皇帝に対するもの。



内モンゴル自治区のチベット仏教学院から招来した清朝期のモンゴル文仏典。



朝鮮民主主義人民共和国のケソン（開城）市郊外にある高麗王朝第31代・恭愍王（在位 1351-74年）の陵墓である（1989年9月撮影）。



八宝雲光洞（中国遼寧省鉄利山）での調査団（1992年9月撮影）。



初の脱穀風景。上ミャンマー、チャウサーにて（1987年8月撮影）。



ベトナムの嫁入り行列—ハノイ近郊村。



イマームのモスクの西イーワーン（イラン・イスファハーン、1995年3月撮影）。



シリア西北部テル・コサック・シャマリ遺跡のポスト・ウバイト期（前4千年紀）の土器工房址から出土した彩文土器（1996年9月撮影）。

目 次

序	
I 沿革	1
II 組織	5
III 職員	9
IV 財政	15
V 施設	17
VI 図書・資料	19
VII 研究・教育活動	25
A 部門研究	25
B 長期国際共同研究	30
C 班研究	31
D 定例研究会	41
E 学術研究・調査	43
F 国際・国内学術交流	51
G 学内教育参加	58
H 刊行物一覧	61
I 執筆著書・論文等総数 受賞	68
VIII 所員の活動	69
IX 附属東洋学文献センター	109

序

この要覧は、西暦であらわして1900年代の年号をもつ最終の冊子となる。この要覧を編集していた時期、東アジアは大きな激動を示しはじめた。1997年7月はじめに、香港がイギリス領から中国へと返還されたことで、東アジアの国際政治体制はその本来の姿を回復させて、歴史的にみて正統な形で次の世紀をむかえる準備をととのえた。しかし、これと全く時期を同じくして、この地域は経済危機という激動にみまわれることになった。この経済危機が発生する直前まで、西欧はこの地域のはやい経済成長におどろき、「東アジアの奇跡」といった言葉が世界中に流通していた。ところが、今「東アジアの時代は終わった」とする声が急速にたかまってきている。

西欧が東アジアに対して、このように極端から他の極端へとその見方を変えるのは、彼等が自らの歴史・文脈で作ってあげてきた社会の見方を前提としてこの地域をみているからである。例えば経済という一見すると普遍的にみえる現象に関しても、西欧はどの地域でもその経済システムは同じ進化の道筋をたどるものとしかみていない。しかし大きく激動するアジアをその内側からみるとき、このような西洋中心史観ではその動きを的確にとらええないであろう。

経済発展段階では先進国にありながら、地域的にはアジアといわれる範囲に入るとされている日本がアジアを見る視点と方法は、やはりアジアを内側から理解するものでなければならないであろう。小生の問題関心からみても、日本のアジア研究の使命は世界的にも重いといわざるをえない。アジア諸地域との知のネットワークを密にすることによって、日本のアジア研究の質を向上させていかねばならないであろう。

本東洋文化研究所の研究スタッフは、対象とする地域・時代そして専門領域の点で実に多様である。東アジアから西アジア・中央アジアまでの対象とし、時代も古代から現代までとなっており、また文献学から現地調査といった風に、その接近方法も多様である。わが国全体を見渡しても、これ程多様な専門家を同じところに擁している研究機関は他にはない。

こういう多様性が、当研究所の研究活動を要約してわかりやすく説明することを困難にしていることは事実である。しかし、所内において、各個人の研究はゆるやかに結合している。その結合の要は、古典研究と現代研究とを有機的に関連づけようとする研究方法の共有である。それはまさに、多様性のなかに統一を求めようとするものであり、その多相性をはっきりと意識してアジアを研究していくには非常に大きな力となりうるものである。所内で育ててきたこのネットワーク型研究方法を、国内外にまでひろげかつその結び付きを深めることで、本研究所を世界のアジア研究の代表的センターとして強化していくことを所全体として計画しているところである。

1998年4月

所長 原 洋之介

I 沿革

1. 略史

【研究部門】

本研究所は1941年11月26日、東洋文化の総合的研究を目的として、東京（帝国）大学に設置創設された。哲学・文学・史学部門、法律・政治部門、経済・商業部門という部門体制で、附属図書館内に研究室、書庫、事務室を置いて発足した。1949年、新たに3部門が増設されたのを機会に研究組織を細分化し、哲学・宗教部門、文学・言語部門、歴史部門、美術史・考古学部門、法律・政治部門、経済・商業部門の6部門に再編成した。同時に本拠を文京区大塚町の外務省所管の旧東方文化学院の一部に移し、これまでの附属図書館内研究室を分室として、研究の充実・発展をはかった。

ついで1951年、人文地理学部門と文化人類学部門が加えられた。これを契機として、従来の諸科学の専門体系による部門構成を、汎アジア経済部門、汎アジア人文地理学部門、汎アジア文化人類学部門、東アジア政治・法律部門、東アジア歴史部門、東アジア美術史・考古学部門、東アジア哲学・宗教部門、東アジア文学部門という地域区分を加味した8部門に再編成した。地域部門の充実をはかる将来計画にもとづいて、1960年には南アジア政治・経済部門、1964年には東北アジア部門、1968年には西アジア歴史・文化部門、1973年には東南アジア経済・社会部門、1978年には西アジア政治・経済部門が増設されて、ようやく13部門を擁するにいたった。

さらに、アジア地域全体が世界のなかでしめる重要性が大きくなったことが明らかになったのに対応させて、本研究所がわが国のアジア研究の中核的、指導的役割を果たすために、研究内容の充実、規模の拡大を含む組織上の再編成を行うことが必要となった。そこで、1981年より新しい構想に基づく大部門制を採用し、これまでの13部門を、汎アジア部門、東アジア部門、南アジア部門、西アジア部門の4部門に統合して再出発し、今日にいたっている。

【附属東洋学文献センター】

1966年には、東洋学に関する文献・情報の収集と国内外の研究者に対する各種のドキュメンテーション・サービスを目的として、附属東洋学文献センターが附属施設として設置された。そこでは、漢籍目録、中国現代書目録作成事業、漢籍調査、漢籍講習会開催、センター叢刊刊行などが行われている。

【建物】

創立以来23年にわたって、本研究所は附属図書館内研究室や外務省所管の建物に仮住いの状態のままであったが、1967年に、本郷校内に総合研究資料館との合同庁舎が完成し、5階以上を本研究所が使用することになった。

しかしその後、研究組織の拡充、研究活動の多様化、図書・資料の増加などにもない、狭隘な施設の改善、とくに書庫の緊急な増設等の強い要望があり、1983年にいって総合研究資料館との交換分合により、本研究所が合同庁舎を全館使用することになった。これにともなって全面的に改修工事を行い、1984年3月に工事が完成し、本研究所の建物総面積は6,577平方メートルで、地下1階より地上8階までとなった。3階までを所長室、事務室、図書館、附属東洋学文献センター、会議室等とし、3階の一部と4階以上は各研究部門の研究室である。なお地下から8階まで（2階を除く）の北西部分（約1,800平方メートル）は書庫にあてられている。また、1995年には旧東方文化学院前の獅子像が大塚から東洋文化研究所に移設された（『学内広報』No.1048、1996年1月29日号参照）。

2. 研究活動と将来計画

【研究所の特色】

本研究所の研究者は各自の専門に従った課題のもとに個人研究を進めている。同時に、各専門分野の孤立を避け、アジア諸地域の総合的研究を推進するという本研究所本来の目的を達成するために、合同の研究会や各種研究班を組織化して学際的研究を育ててきている。また研究陣容の補強を図るため、学内外の専門分野の研究者に研究を委属し、協力を求める方針をとってきた。

東京大学が大学院重点化の中で大きく変わりつつある現在、本研究所も、研究課題の設定や研究組織の面で大きな転換を必要としている。本学の他の部局ならびに他大学等でのアジア研究と比較して、本研究所の研究の特色を述べるならば、それは文献研究と現地調査を有機的に結合させた、古典研究と現代研究との統合、

と表現できる。

【長期計画研究】

以上のような特色ある研究をより深めるためには、研究所としてまとまりのある研究プロジェクトが必要である。本研究所は、1988年度から3ヵ年計画でなされた文部省の科学研究費重点領域研究「イスラムの都市性」の実施に際して、教官の半ばが参加してその研究計画実施の中心機関として機能した実績をもつ。その経験を承けて1993年度から10年計画で、研究所をあげて取り組む二つの研究プロジェクトを設定した。一つは、「激動するイスラーム圏の政治・社会構造の変容過程の研究」であり、他の一つは、「中国社会の変動が及ぼすアジア諸国への影響の研究」である。また1995年度から準備作業を開始した第三の長期計画研究プロジェクトとして、「環ベンガル湾地域における社会・経済・文化の交錯と変動」を進めている。これらの研究プロジェクトは、本研究所が研究情報センターとしての役割を引き受け、本学の他部局や他大学・研究所等の研究者、そして海外、なかんずくアジア諸国の研究者の協力を得て行われている。このような長期にわたる大規模な研究のためには、必要な予算を確保することと同時に、研究人員の確保が重要である。多様な資金源を動員してアジア諸国の研究者を招聘して研究計画を推進させているが、同時に、研究のネットワークを恒常化させるために、外国人客員部門の新設を求めている。

【研究体制の将来計画】

1995年8月から1996年2月にかけて海外からの研究者の参加を得て外部評価作業が行われた。そこでは、より広範な国際的研究活動を進めるためにも、(1)地域部門間の連結を深化させるための汎アジア研究部門の役割の強化、(2)現在欠けている東南アジア研究部門・中央アジア研究部門の増設の必要性、(3)アジア研究に関する情報センターとしての役割の強化、(4)若手研究者養成の緊急性などが提言された。この提言に応じて、研究交流部門を内部処置として作り、そこに現在本研究所では欠けている研究を行うために、外国人を含めた研究者を助教授として招聘することにした。

総じて、内外共に大きな転換期にある現在、本研究所のこれまでの研究蓄積を踏まえ、21世紀におけるアジア研究の課題を見通す議論を深め、その中で、研究・情報センターとしての研究所の体制を整えていくことが重要となっている。特に、アジア研究に関する多様な情報を世界中に発信しうるアジア研究情報センターの設立を強く構想している。

【海外研究拠点】

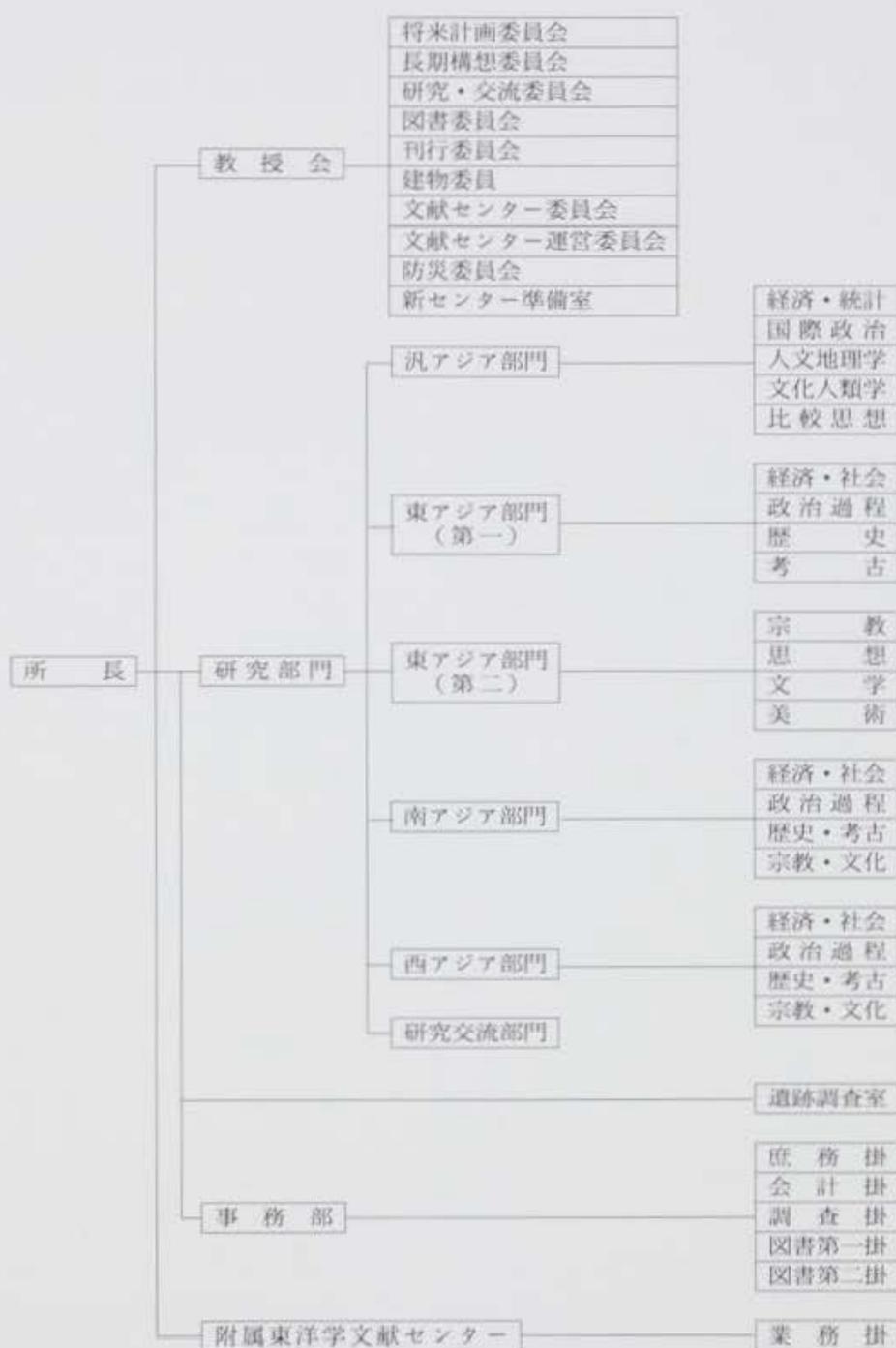
以上のような研究計画を実り豊かなものにするためには、現地定着型の研究を組織することが必要であるが、そのために本研究所は海外研究拠点を作ることを構想してきた。その最初の試みとして、1995年10月に香港大学アジア研究センターと学術交流協定を締結し、主として中国を軸とする長期計画研究に関する共同研究をスタートさせた。交流協定は、(1)共同研究の実施、(2)学者・研究者の相互訪問、(3)資料および研究情報の交換を柱としている。更に、1997年度に入り、シンガポール大学社会学部と同様な学術交流協定を結び、環ベンガル湾地域をにらんだ共同研究をスタートさせた。

また、上海復旦大学、タイ・カセサート大学経済学部とも交流協定に基づいた共同研究を進めつつある。さらに、北京、デリー、イスタンブール、アンマンなどを次の有力な候補地として考え、研究拠点設置と研究ネットワーク形成のために研究所は全力を傾けている。

【大学院教育】

東京大学の大学院構想が実施されていく中で、大学附置の研究所は研究所講座として大学院教育にかかわることになった。その設立当初から若手研究者の育成をアジア研究の重要な一貫として位置付けてきた本研究所は、アジア地域の比較論・関係論を中心とする新たな大学院研究科ないしは専攻の設置を構想してきた。大学全体の議論の過程で、この構想を実現すべく努力をつづけていきたい。

II 組織



【歴代所長】

氏名	在職期間	氏名	在職期間
桑田 芳蔵	1941.11.26-43. 3.31	荒 松雄	1972. 4. 1-73. 3.31
宇野 圓空	1943. 4. 1-46.10. 5	窪 徳忠	1973. 4. 1-74. 3.31
戸田 貞三	1946.10. 6-47. 9.30	佐伯 有一	1974. 4. 1-76. 3.31
辻 直四郎	1947.10. 1-54. 3.31	大野 盛雄	1976. 4. 1-78. 3.31
仁井田 隆	1954. 4. 1-58. 7.10	深井 晋司	1978. 4. 1-80. 3.31
飯塚 浩二	1958. 7.11-60. 7. 9	中根 千枝	1980. 4. 1-82. 3.31
結城 令聞	1960. 7.10-62. 7. 9	大野 盛雄	1982. 4. 1-84. 3.31
江上 波夫	1962. 7.10-64. 7. 9	尾上 兼英	1984. 4. 1-86. 3.31
飯塚 浩二	1964. 7.10-65. 2.28	山崎 利男	1986. 4. 1-88. 3.31
小口 偉一	1965. 3. 1-66. 3.31	斯波 義信	1988. 4. 1-90. 3.31
川野 重任	1966. 4. 1-68. 3.31	池田 温	1990. 4. 1-92. 3.31
小口 偉一	1968. 4. 1-70. 3.31	松谷 敏雄	1992. 4. 1-94. 3.31
泉 靖一	1970. 4. 1-70.11.15	後藤 明	1994. 4. 1-96. 3.31
川野 重任 (事務取扱)	1970.11.16-70.12.17	濱下 武志	1996. 4. 1-98. 3.31
鈴木 敬	1970.12.18-72. 3.31	原 洋之介	1998. 4. 1-現在

【名誉教授】

氏名	称号授与	氏名	称号授与
江上 波夫	1967. 5	鎌田 茂雄	1988. 5
川野 重任	1972. 5	山崎 利男	1990. 5
窪 徳忠	1974. 5	板垣 雄三	1991. 5
鈴木 敬	1981. 5	池田 温	1992. 5
荒 松雄	1982. 5	山田 三郎	1992. 5
大野 盛雄	1985. 5	田仲 一成	1993. 5
松井 透	1987. 5	友杉 孝	1993. 5
中根 千枝	1987. 5	松丸 道雄	1995. 5
尾上 兼英	1988. 5	松谷 敏雄	1997. 5

【歴代事務長】

氏名	在職期間	氏名	在職期間
山高 力三	1941.11.27-42. 9.30	伊藤秀三郎	1981. 4. 1-83. 3.31
根本 喜蔵	1942.10. 1-44. 7. 9	岡部 藤男	1983. 4. 1-86. 3.31
長内太郎吉	1944. 7.10-54. 7.15	木内 義一	1986. 4. 1-90. 3.31
工藤松之助	1954. 7.16-63.10.31	江澤 兵治	1990. 4. 1-92. 6. 1
宮本 健	1963.11. 1-69. 2.28	石川 純男	1992. 6. 1-95. 3.31
新井 康次	1969. 3. 1-74. 3.31	千葉 勝志	1995. 4. 1-97. 3.31
斎藤 益	1974. 4. 1-77. 6.30	小林 邦男	1997. 4. 1-現在
三浦 皓守	1977. 7. 1-81. 3.31		

【歴代受賞者】

本研究所の教官の文化勲章・文化功労者・学士院賞の各受賞者は次の通りである。

文化勲章	江上 波夫	1991年
文化功労者	辻 直四郎 (併)	1978年
	江上 波夫	1983年
	山本 達郎 (併)	1986年
	川野 重任	1993年
	中根 千枝	1993年
学士院賞	仁井田 陞	1934年
	宇野 圓空	1942年
	山本 達郎 (併)	1952年
	周藤 吉之	1956年
	福島 正夫	1963年
	鎌田 茂雄	1976年
	荒 松雄	1978年
	池田 温	1983年
	鈴木 敬	1985年
	田仲 一成	1993年

Ⅲ 職 員 (1998年5月1日現在)

所 長 原 洋之介

汎アジア部門

原 洋之介 教 授 (707室)
池本 幸生 助教授 (711室)
猪口 孝 教 授 (702室)
田中 明彦 教 授 (306室)
原田 至郎 助 手 (413室)
松井 健 教 授 (703室)
関本 照夫 教 授 (712室)
岡本 サエ(兼) 教 授 (305室)
小倉 泰(兼) 助教授 (307室)

東アジア部門 (第一)

濱下 武志 教 授 (411室)
高見澤 磨 助教授 (403室)
宮嶋 博史 教 授 (410室)
黒田 明伸 助教授 (402室)
平勢 隆郎 助教授 (407室)
吉開 将人 助 手 (412室)

東アジア部門 (第二)

蜂屋 邦夫 教 授 (502室)
丘山 新 教 授 (508室)
鈴木 隆泰(兼) 助 手 (512室)

尾崎 文昭 教 授 (511室)
巖 鋒 助教授 (503室)
小川 裕充 教 授 (510室)

南アジア部門

加納 啓良 教 授 (607室)
高橋 昭雄 助教授 (610室)
柳澤 悠 教 授 (603室)
中里 成章 教 授 (608室)
井坂 理穂 助 手 (612室)
上村 勝彦 教 授 (602室)
永ノ尾信悟 教 授 (611室)

西アジア部門

鈴木 董 教 授 (803室)
長澤 榮治 教 授 (811室)
羽田 正 教 授 (807室)
後藤 明 教 授 (808室)
鎌田 繁 教 授 (802室)
森本 一夫 助 手 (812室)

附属東洋学文献センター

センター長 原 洋之介
センター主任 岡本 サエ
助教授 小倉 泰
助手 鈴木 隆泰

研究機関研究員*

菊地 達也
熊谷 滋三
小泉 龍人
戸田 裕久
Werner, Christoph

非常勤講師*

飯島 涉
臼井佐知子
小川 隆
川島 耕司
官 寧
黒田 卓
小泉 龍人
小杉 泰
小林 春夫
斉藤 照子
坂本 勉
篠原 徹
清水 和裕
杉野 実
武内 房司
谷垣真理子
中田 考
林 佳世子
檜垣 泰彦
深見奈緒子
三沢 伸生
水野 善文
廖 赤 陽
Sadria, Modjtaba

* 1996～1998 年度

事務部

事務長 小林 邦男
総務主任 風間 正之
図書主任 秋山 紀

庶務掛

庶務掛長 柳澤 賢次
国際交流掛主任 結城 剛吉
庶務掛主任 益子 一郎
事務官 樽沼 晶子

会計掛

会計掛長 坂井 誠吾
主任 三浦 弘三
事務官 丸山 信明

調査掛

調査掛長 飯野 洋一

図書第一掛

図書第一掛長(併) 秋山 紀
事務官 神田百合枝
事務官 渋谷 義治

図書第二掛

図書第二掛長 合田 晃一
事務官 長野 真
事務官 笠井 伊里
事務官 山口 淳

業務掛

業務掛長 金子 俊明
事務官 芳賀 満子
事務官 新居 彌生

遺跡調査室

技 官 野久保雅嗣

職員数（1998年5月1日現在）

教授 22名 助教授 7名 助手 5名
事務官 20名 技官 1名

教職員の異動等（1996年8月～1998年5月）

（教官）

1997. 3. 31 教授 松谷敏雄 停年退職
1997. 3. 31 教授 丸尾常喜 停年退職
1997. 4. 1 教授 猪口 孝 復職（国際連合大学上級副学長より）
1997. 4. 1 助手 笠井直美 名古屋大学言語文化学部講師に昇任
1997. 4. 1 高見澤磨 助教授（東アジア部門）に採用
1997. 5. 20 元教授 松谷敏雄 名誉教授の称号授与
1997. 9. 1 助教授 羽田 正 教授（西アジア部門）に昇任
1997. 10. 1 黒田明伸 助教授（東アジア部門）に転任
1998. 3. 1 助手 山中由里子 国立民族学博物館助手に転任
1998. 3. 31 教授 末成道男 停年退職
1998. 4. 1 小倉 泰 助教授（附属東洋学文献センター）に採用
1998. 4. 1 池本幸生 助教授（汎アジア部門）に転任
1998. 4. 1 巖 鋒 助教授（東アジア部門）に採用
1998. 4. 1 助教授 田中明彦 教授（汎アジア部門）に昇任
1998. 4. 1 助教授 長澤榮治 教授（西アジア部門）に昇任

（事務官）

1997. 4. 1 事務長 千葉勝志 経済学部事務長に配置換
1997. 4. 1 図書第二掛長 栗林久美子 附属図書館情報管理課和書目録情報掛長へ配置換
1997. 4. 1 庶務掛 若林美由紀 人事課情報・記録掛主任に昇任
1997. 4. 1 会計掛 秋廣耕平 生産技術研究所経理課司計掛に配置換
1997. 4. 1 農学部附属牧場事務長 小林邦男 事務長に配置換
1997. 4. 1 附属図書館情報管理課和書目録情報掛長 合田晃一 図書第二掛長に配置換
1997. 4. 1 医学部用度掛 丸山信明 会計掛に配置換
1997. 4. 1 樽沼晶子 庶務掛に新規採用
1997. 4. 1 業務掛長 飯野洋一 調査掛長に配置換

1997. 4. 1 図書第一掛 芳賀満子 附属東洋学文献センター業務掛に配置換
1997. 4. 1 図書第一掛 新居彌生 附属東洋学文献センター業務掛に配置換
1997. 4. 1 業務掛 神田百合枝 図書第一掛に配置換
1997. 4. 1 業務掛 渋谷義治 図書第一掛に配置換
1998. 3. 31 遺跡調査室 千代延恵正 定年退職
1998. 3. 31 調査掛主任 岡 徹 定年退職
1998. 3. 31 業務掛 畦浦美矢子 定年退職
1998. 4. 1 会計掛給与主任 原 常子 医学部給与掛主任に配置換
1998. 4. 1 医学部附属病院分院 用度掛主任 三浦弘三 会計掛主任に配置換
1998. 5. 1 野久保雅嗣 遺跡調査室に新規採用

IV 財 政

1. 校 費

年度	決算額 (千円)	年度	決算額 (千円)	年度	決算額 (千円)
1992	159,039	1994	165,664	1996	198,800
1993	162,961	1995	185,313	1997	178,925

2. 科学研究費補助金

1996 年度			1997 年度		
研究種目	交付決定額 (千円)	件数	研究種目	交付決定額 (千円)	件数
基盤研究(A)(1)	2,700	1	基盤研究(A)(1)	10,300	2
基盤研究(B)(2)	1,200	1	基盤研究(B)(2)	9,500	3
			萌芽的研究(B)(2)	1,400	1
重点領域研究(1)	16,800	3	重点領域研究(2)	6,000	1
			奨励研究(A)	1,800	1
国際学術研究 (学術調査)	27,400	4	国際学術研究 (学術調査)	18,100	2
国際学術研究 (共同研究)	1,700	1	国際学術研究 (共同研究)	800	1
特別研究員奨励費	3,700	4	特別研究員奨励費	8,000	9
研究成果公開促進費	6,680	2	研究成果公開促進費	2,880	1
合 計	60,180	16	合 計	58,780	21

3. その他の経費

以上のほか、「VII E 学術研究・調査」の項で後述するように、以下の財団

より研究助成等を受け入れた。

順益台湾原住民博物館林迺翁文教基金会

トヨタ財団

平和中島財団

鹿島財団

V 施 設

1. 建 物

- 1941年11月 東京帝国大学附属図書館内に新設
- 1948年9月 文京区大塚町56旧東方文化学院建物に移転。附属図書館内に分室をおく。敷地面積 5,081.22 m² 本館建物面積 3,012.5 m² (内 1,500 m² 程は外務省研修所が使用)
- 1965年10月 本郷構内新庁舎第1期工事完成により一部移転
- 1968年7月 全面移転完了
- 1983年3月 総合研究資料館と交換分合し、全館を使用。建物面積 6,577 m²
- 1984年3月 全面改修工事完成

本研究所の建物は1965年に一部建築され、その後、増築・改修を経た。現在、老朽化と狭隘化の二つの問題点があるものの、1984年の全面改修工事により雨漏りや内外壁面の劣化とヒビ割れは一応解消されている。

ただ、狭隘化については、問題は解消されていない。世界的な水準の漢籍を所蔵する関係で、建物の全スペースの3割以上を書庫や閲覧室として、収集・公開の充実を計っているものの、漢籍を含む中国語文献の飛躍的増加や、アラビア語などの非漢字文献の積極的収集により、すでに限界を超えつつある。また、附属東洋学文献センターを改組・拡充して、アジア研究情報センターとし、従来から行ってきた情報資料の収集・公開をより一層進展させようとの計画に関しても、現在のスペースでは、完全に不足する状況となっており、抜本的な増築が望まれる。

2. コンピュータ・ネットワークの進展状況

本研究所では、1996年4月に電腦ネットワーク委員会を設置し、東文研ネッ

トワーク・システムを構築した。サーバにはIBMワークステーション、ウィンドウズ・マシン、マッキントッシュ・マシン各一台を使用し、研究所のほぼ全てのパーソナル・コンピュータをクライアントとして接続している。1996年7月よりホームページを本格的に運用しはじめ、教官の研究情報、図書・資料情報、事務情報を一括して扱うようになっている。

研究情報としては、既に『戦後日本形成データベース』シリーズと『東洋文化研究所所蔵現代中国書データベース』、『近現代中国関係雑誌目次データベース』がホームページ上で公開され、その他『中国に関する文化人類学的研究のための文献解題』、『南アジア文献検索データベース』、『廣東宗族文書』、“A Collection of Mantras In the Purāṇas”, “A List of Vratas and Utasavas”などが公開準備中である。

なお、東洋文化研究所ホームページ上から世界各地のアジア研究諸機関やアジア関係の新聞サイトへアクセスできるようになっており、その充実度は高く評価されている。事務情報としては、教官系と事務官系とが一体となり、各種事務情報のオンライン化が実現されている。

本研究所は、アジア関係の研究・資料情報の収集と蓄積、分析と加工、および研究情報のネットワーク事業はその中心をなすものである。

東文研ホームページのURLは <http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp> である。

VI 図書・資料

1. 図書

本研究所は、アジア諸地域に関する図書資料を約 54 万冊、雑誌を約 5,480 種所蔵している。とくに漢籍は今日では収集不可能な貴重なものが多く、日本では有数のコレクションである。その他に、中国語、朝鮮語、アラビア語、トルコ語、ベルシャ語、インドネシア語、サンスクリット語などの図書・雑誌も鋭意収集に努めている。

本研究所の図書・雑誌数は 1998 年 3 月 31 日現在、次のとおりである。

和・中・朝文図書	417,153 冊	
欧文図書	122,550 冊	計 539,703 冊
和文雑誌	1,673 種	
中文雑誌	2,356 種	
朝文雑誌	313 種	
欧文雑誌	1,135 種	計 5,477 種

この他、マイクロフィルム約 5,200 巻、マイクロフィッシュ約 111,000 枚を所蔵する。

主要所蔵図書

〔大木文庫〕本研究所創設時に、大木幹一氏より中国法制関係書総数 3,168 部、45,452 冊の寄贈を受けた。公牘類の数百部は本文庫の柱梁をなし、法律関係の貴重書をはじめ、明清以後の時期の研究には不可欠の蒐集資料である。1959 年に『東京大学東洋文化研究所大木文庫分類目録』が編纂され、刊行された。

〔帝国学士院東亜諸民族調査室旧蔵書〕1944 年帝国学士院東亜諸民族調査室の解散にともない、その蔵書の和漢洋書・雑誌・資料等 2,000 冊が移管された。このなかには西欧におけるアジア諸民族研究の主要な文献が集められている。

〔東方文化学院旧図書〕1929 年に、東方文化に関する研究機関として、外務省所管の東方文化学院東京研究所が創設されたが、1948 年に廃された。その旧蔵書

和漢洋あわせて 103,587 冊が、1967 年 3 月に本研究所に移管された。漢籍の中核は、1929 年に中国浙江省の徐則恂氏より一括購入した東海藏書樓藏書である。

〔松本忠雄氏旧蔵書〕 1949 年度科学研究費により松本忠雄氏旧蔵の和漢洋書、雑誌など約 3,000 冊を購入した。とくに近代中国研究資料として重要なものがある。

〔長澤規矩也氏旧蔵書〕 1951・53 両年度科学研究費により、長澤規矩也氏旧蔵の約 3,000 冊を購入した。その内容は明清時代の戯曲小説類である。1961 年 1 月、本研究所創立 20 年にあたり、同氏から約 150 冊の補充を得るとともに、『雙紅堂文庫分類目録』を刊行した。

〔清野謙次氏旧蔵書〕 1952・53 両年度科学研究費により、清野謙次氏旧蔵洋書 750 冊を購入した。人類学・考古学関係のものを根幹とする。1978 年 3 月に『東京大学東洋文化研究所清野文庫分類目録』を刊行した。

〔矢吹慶輝氏旧蔵書〕 1952 年度科学研究費により、矢吹慶輝氏旧蔵洋書約 360 冊を購入した。英仏独のマニ教の文献を中心とし、仏教遺跡の発掘報告書も含まれている。

〔下中文庫〕 下中弥三郎氏より、1953 年 1 月から 1957 年 6 月までの、戦後出版の中国書 4,500 冊、中国雑誌 10 種および戦後出版の東洋関係洋書 130 冊の寄贈を受けた。とくに中国書は、当時入手できた書の主要なものをほとんど網羅している。

〔東京銀行調査部旧蔵資料〕 1959・60 両年度にわたり、東京銀行調査部所蔵の経済関係書を主とする和漢書・資料類約 18,000 冊の寄贈を受けた。

〔仁井田陸氏旧蔵書〕 本研究所名誉教授仁井田陸氏の逝去（1966 年 6 月）後、所蔵の中国書 5,000 冊、洋書 120 冊、和書 2,200 冊、清代公私文書類 900 余点、50 基の碑文の拓本を受け入れた。大木文庫とともに旧中国の社会研究に重要なものである。

〔我妻栄氏旧蔵資料〕 我妻栄氏の逝去（1973 年 10 月）後、所蔵の和洋法学文献および各種資料が東京大学に寄贈された際、本研究所はとくにアジア法制関係文献資料総数 647 部 932 冊の寄贈を受けた。1982 年 3 月に『我妻栄先生旧蔵アジア法制関係文献資料目録』を刊行した。

〔倉石武四郎氏旧蔵書〕 1975 年度に本学名誉教授倉石武四郎氏の漢籍を主とする蔵書を収蔵することとなり、1981 年度までにその重要な部分、漢籍約 4,300 点などを購入した。

〔江上波夫氏旧蔵書〕 1981・82・84 各年度にわたり、本研究所名誉教授江上波夫氏の蔵書のうち、歴史学、民族学、考古学を中心とした洋書の一部約 2,550 点を購入した。

[The Daiber Collection I] 1986・87 兩年度にわたり、東洋学文献センターと協力し、ハンス・ダイバー氏の蒐集した計 367 点の写本を購入した。イスラームの宗教、思想、歴史に関する重要な資料である。1988 年に *Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Daiber Collection, Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, by Hans Daiber* を刊行した。

[文淵閣本四庫全書影印本] 1988 年度に文淵閣本四庫全書影印本（索引つき）全 1,501 冊を購入した。清代以前の中国の古典文献を網羅した最も基本的な叢書で、中国研究上不可欠の重要性をもっている。

[オランダ植民地省公文書索引およびジャワ官報] 1989 年度に、マイクロフィッシュ化された資料一式を購入した。前者はオランダ国立公文書館所蔵の旧植民地省文書（1980 年～1921 年）の索引書数百巻分を網羅し、後者はインドネシアのオランダ植民地政府が 1928 年～1939 年に公布した官報の集成である。

[乾隆版大藏經] 1990 年度に全 724 函（毎函 10 冊）、大清三藏聖教目録一函（5 冊）を購入した。中国最後の木版大藏經で、1657 部の仏教典籍が収録されている。漢文の大藏經で経版木が保存されているものは、高麗蔵とこの乾隆版のみで、きわめて貴重な資料である。

[Ouseley Collection] イギリスの外交官で東洋学者の G. Ouseley 卿（1770—1844）の旧蔵書の一部。17 世紀から 19 世紀にかけてのヨーロッパ人のインド、中近東への旅行記とベルシャ文学作品を主とした 60 点、全 106 冊からなる。Ouseley 自身の書き込みが随所に見られる点など、資料的価値が高い。

[南アジア伝導教団資料集成] 南アジア各地で伝導活動を行ったキリスト教団の、18 世紀末から 20 世紀までの年報、諸会議の議事録、往復文書、報告書等を含んだマイクロフィッシュ資料である。

[Indonesian Monographs, 1945—1973] オランダの王立・言語・地理・民族学研究所が蒐集した、独立後インドネシアの社会科学関係出版物 3,258 点をマイクロフィッシュにまとめたもの。内容はきわめて多彩で、インドネシア現代史の研究に不可欠の資料集である。

[故今堀誠二氏旧蔵書・資料] 広島大学名誉教授今堀誠二氏の逝去（1992 年 10 月）後、所蔵の漢籍 300 点、中国書 2,000 冊、文書資料 500 点を購入した。近現代中国の社会史資料、華僑史資料など多くの原資料を含む。（1994 年度一般設備費）

[The Daiber Collection II] 本研究所所蔵の「Daiber Collection I」を補完する、18 世紀を中心とする 12 世紀から 20 世紀初頭にいたるアラビア語の写本 120 点の集成で、西アジア研究・イスラーム研究に不可欠の一次資料である。1996 年

に *Catalogue of the Arabic Manuscripts In the Daiber Collection II, Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, by Hasns Daiber* を刊行した。(1994年度国立学校特別経費)

[東アジア宗族社会史関係資料] 東アジア全域にわたる宗族社会史の比較研究に重要な資料集。朝鮮族譜集成 494冊、中国華南宗族社会史資料、南洋華僑・華人関係資料 2,263冊からなる。族譜、社会、華人史の基本資料として貴重な資料である。(1995年度一般設備費)

[中国西北文献叢書] 陝西、甘肅、寧夏、青海、新疆などの中国西北地方に関する、歴史、地理、民俗、文学そのほかの諸分野の基本文献を網羅した叢書。(1995年度一般設備費)

[オスマン語・トルコ語年鑑定期刊行物コレクション] トルコにおいてオスマン語および現代トルコ語で刊行された年鑑類、定期刊行物。19世紀初頭オスマン帝国時代の国家年鑑や、西アジア各地方およびバルカンに関する公的な年鑑など、政治、社会、経済から文化にいたる広汎な分野を網羅し、近現代の西アジア研究者にとって類例の少ない貴重な資料群である。(1996年度一般設備費)

[西アジア関連写本集成] ミンガナ・コレクション、ロンドン大学東洋アフリカ研究所およびユダヤ国立大学所蔵のアラビア語を中心としたマイクロフィッシュによる写本集成。コーラン学から、法学、文学、自然科学、歴史学、宗教諸学を含むイスラームを中心とした西アジアの思想・文化・歴史の研究に不可欠の資料である。(1996年度一般設備費)

[中国第一歴史档案館所蔵清代档案資料] 1997年度に標記档案資料のマイクロフィルムを購入した。内容は「宮中硃批奏摺財政類」「軍機処録副奏摺全国水利雨水自然災害資料」「内閣京察冊」「宮中履歷片」「戸部一度支部棒銀米冊」「琿春副都統衛門档案」「刑法部胎谷案」「吏部造送封贈姓氏冊」「清代琉球档案史料」である。これらは総数一千万件におよぶ中国第一歴史档案館所蔵の清朝公文書の一部を成すものであり、清代中国の政治・制度・経済・社会の分析において極めて重要な第一次資料である。(1997年度一般設備費)

以上の各コレクションのほか、1958年度から3か年にわたって、文部省科学研究費による総合研究「アジア地域の社会・経済構造」の一環として、資料(主として洋書) 1,800冊を購入し、また1961年度から1965年度まで機関研究および特定研究「アジア社会の近代化と文化の変動」において、継続して資料の蒐集に努め、総数4,771冊に達した。

2. 資料

本研究所の所蔵する諸種の資料のうち、重要なものを以下に掲げる。

[殷代甲骨] 本研究所所蔵甲骨は、次の三部分からなる。第一は、故河井仙郎氏旧蔵の1,708片で、1979年に現蔵者井上富美子氏より寄贈された。第二は故田中慶太郎氏旧蔵の393片で、1979年に購入した。第三は旧蔵者三浦清吾氏より寄贈された2片である。合計2,103片に達し、京都大学人文科学研究所に次ぐ、わが国有数の蒐集である。これは、整理・綴合の上、松丸道雄『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字 図版篇』（東洋文化研究所報告1983年）として刊行された。

[中国歴史古銭・銭范] 旧東方文化学院の蒐集品で、殷代の貝貨、戦国時代の布銭・刀銭・郢爰からはじまり、歴代の代表的貨幣を収蔵する。約1,250点の古銭と、10点の銭の范模を含む。（整理中）

[中国考古資料] 上記の甲骨、古銭以外に、瓦当約110点、鏡、戈、戟、鏃などの青銅器、玉器、土器、磚、磚製買地券、壁面片、俑、仏像、衣服、室内装飾品、土俗品がある。大部分は旧東方文化学院が購入し、本研究所に移管されたものである。

[中国絵画資料（原版・焼付写真・カラスライド等）] 米国、カナダ、欧州、東南アジアの美術館、個人蒐集家が所蔵する中国絵画、および日本現存の中国絵画に関するものが主体で、その他に米国ミシガン大学アーカイヴより購入した中国絵画の焼付写真、東京国立文化財研究所原版からの焼付写真などがあり、現在約10万点にのぼる。「東洋学文献センター叢刊」として5冊の目録が1977～83年に刊行され、図録は『中国絵画総合図録』（全5巻）として東京大学出版会より1982年～83年に刊行された。

[中国清代・民国期の文書資料] 17世紀から20世紀におよぶ、北京をはじめ嘉興、武進、蘇州、通州、宝応、鳳山などの土地文書を中心とし、その他公私文書類約二千数百点がある。仁井田陞名誉教授旧蔵遺贈分や旧東亜研究所収集文書などを含む。目録と内容の一部は、1983年～86年に『東洋文化研究所蔵中国土地文書目録・解説（上）（下）』（東洋学文献センター叢刊）として刊行された。（整理中）

[内蒙古出土学術資料] 江上波夫名誉教授が戦前に内蒙古で発掘・採集した資料約1万点が、1983年に寄贈された。主として土器片・陶器片である。資料の一部は江上氏のいくつかの論文に掲載されているが、圧倒的多数は未発表のものである。

[インド・イスラム史跡調査関係資料] デリーおよびインド各地に現存するサルタナット時代のムスリム遺跡に関する資料で、写真、実測図などが主なものである。1959年～62年度に「東京大学インド史跡調査団」が実施した現地調査の成果の一部である。

[西アジア考古資料] 古代イラン文明の研究を目的として、1956年以来「東京大学イラン・イラク遺跡調査団」が両国における遺跡14か所を発掘・調査した結果、収集したもの。その数は数万点に達し、大部分は発掘品で、考古学上第一級資料である。

3. 図書室の利用状況

これらの図書資料は広く内外の研究者に利用されている。1996年度と97年度の図書室の利用状況は次の通りである。

閲覧者数など

閲覧者数 *学内は所内を除く
*()内は外国人内数

利用冊数

区分	学内	学外	計
1996年度	2,164 (602)	2,358 (173)	4,522 (775)
1997年度	2,034 (699)	2,711 (755)	4,745 (1,454)

	図書	雑誌	計
1996年度	17,695	9,877	27,572
1997年度	17,901	8,011	25,912

VII 研究・教育活動

A 部門研究

汎アジア部門

原 洋之介	池本 幸生 (98年4月から)	猪口 孝	田中 明彦
原田 至郎	松井 健	末成 道男 (98年3月まで)	関本 照夫
岡本 サエ	小倉 泰 (98年4月から、98年5月16日逝去)		

汎アジア部門はアジアという対象を、経済学・政治学・人文地理学・文化人類学・比較思想という社会科学・人文科学の広い範囲にわたり、個別専門分野ならびに学際的な領域の理論と方法に深く関わりながら研究を深化させている。同時にこの部門ではアジアのアジア研究者とのネットワーキングにも力を注ぎ、アジア研究の地域的ハブとしての機能を担おうとしている。日本も重要な研究対象としている。

経済・統計研究分野は、アジア諸国経済発展の実証的な比較研究を通して、アジア諸国経済発展のアジア域内および世界における国際的位置づけを明らかにするとともに、欧米で提起・展開された経済発展論の再検討を試みている。国際政治分野では、アジアの国際政治の実証的・理論的な研究を精力的に行っている。人文地理学研究分野は、アジア諸地域におけるフィールドワークに基づいて、社会の全体像を描き、記述にかかわる理論研究を推進するとともに、地域研究の深化を目指す。アジア地域の自然と文化の統合的全体を展望することを目標とする。文化人類学研究分野は、アジア諸地域の社会・文化の比較研究を目的とし、ミクロな地域社会の日常生活をフィールドワークの方法でつぶさに明らかにする方法を主に用いて、下からあるいは周縁から、よりマクロな社会の全体像を見透かそうとしている。比較思想研究分野は、東アジアの思想交流の中にみられる、漢字文化圏の諸民族の思惟的特徴を研究する。

アジア諸地域における社会・文化の変容過程

アジア諸国経済発展の比較研究

原 洋之介 アジアの市場経済発達の比較

池本 幸生 アジアにおける所得分配

アジアにおける政治変動と国際関係

猪口 孝 太平洋アジアにおける民主化と国際政治

田中 明彦 東アジアをめぐる主要国間の国際政治

原田 至郎 アジアにおける国際紛争

アジアにおける都市と農村

松井 健 西南アジアの都市と遊牧民

アジア諸社会の固有文化とその変容

末成 道男 東アジア社会の変容過程

関本 照夫 インドネシア社会の統合過程

アジアにおける思想・文化の比較研究

岡本 サエ 東アジアの比較思想

小倉 泰 比較による南アジアの宗教建築の考察

東アジア部門（第一）

濱下 武志	高見澤 磨 (97年4月から)	宮嶋 博史	黒田 明伸 (97年10月から)
平勢 隆郎	吉開 将人	熊谷 滋三 (97年3月まで)	

東アジア第一部門は、中国、朝鮮、日本、ときにはベトナムを含む東アジア世界を総体として取り上げ、社会科学、歴史科学的方法によって過去から現在にいたる動態を把握することを目標とする。この研究では、とくに東アジア第二部門と協力して、学際的な地域研究による生きた全体像をめざすことは言うまでもない。研究分野としては、経済・社会、政治過程、歴史、考古を包含し、「東アジアにおける国家権力と社会経済構造」を研究課題として、共同研究を継続している。この部門では、「17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究」（主任濱下）、「朝鮮伝統社会の構造とその変容」（主任宮嶋）、「中国出土文字史料とその歴史的背景」（主任平勢）などの研究班を組織し、本学内外の協力を得、継続して研究を進めている。

東アジアにおける国家権力と社会経済構造

濱下 武志	中国近代の経済発展
高見澤 磨	現代中国の法律と社会
宮嶋 博史	近代朝鮮の社会経済構造
黒田 明伸	中国近世・近代の経済と制度
平勢 隆郎	中国古代帝国の形成
吉開 将人	中国古代国家と手工業
熊谷 滋三	石刻史料からみた漢代社会

東アジア部門（第二）

蜂屋 邦夫	丘山 新	鈴木 隆泰	丸尾 常喜 (97年3月まで)
尾崎 文昭	巖 鋒 (98年4月から)	笠井 直美 (97年3月まで)	小川 裕充

東アジア第二部門は、中国を中心とする東アジア地域の思想、宗教、文学、美術を研究対象とする部門である。部門研究としては「東アジアにおける庶民文化の形成と展開」を課題としている。

一般的に中国では、権力エリートと文化エリートとは分離せずには癒着しており、したがって権力エリートは文化を独占して、庶民は非文化的階層とみなされてきた。しかし、庶民は文化獲得の努力をくり返して行い、権力エリートの文化とは異質な「庶民文化」を生み出した。それは権力エリートからは非正統的な文化とみなされ、強く意識されなかったにせよ反権力的指向をもっていた。「庶民文化」は六朝から唐末までに形成され、宋元以後にめざましく発展し、各地方に広がっていたと考えられる。

この課題に対して、各研究分野で独自の検討をするとともに、共同してその解明をめざしている。

東アジアにおける庶民文化の形成と展開

蜂屋 邦夫	庶民における三教思想の受容
丘山 新	仏教経典の民衆化

鈴木 隆泰	インド大乘經典の形成過程
丸尾 常喜	中国近代文学における民衆文化の諸問題
尾崎 文昭	近現代中国の小説に対する認識
巖 鋒	1980年代文学の大衆性
笠井 直美	水滸説話の形成と展開
小川 裕充	明清の職業画家

南アジア部門

加納 啓良	高橋 昭雄	柳澤 悠	中里 成章
井坂 理穂	上村 勝彦	永ノ尾信悟	戸田 裕久 (97年7月から)

南アジア部門は、東南アジア諸国からインド亜大陸までの地域を研究の対象とする。その地域は多様な言語と文化をもつ人々が複雑な社会を形成したうえ、欧米諸国による植民地支配のもとでの苦い経験を経て、戦後あいついで独立した諸国からなる地域であるので、今日の事情を理解するのは決して容易なことではない。この理解のため、本部門は政治・経済・社会・文化などにわたって過去現在の両者を総合的に研究している。

本部門では、とくに「環ベンガル湾地域における文化・文明の交錯」を課題として研究を進めてきた。このため、年に数回、部門の構成員が参加して、この課題のもとに部門研究会を開催している。さらにまた、深く分析、検討をするために、所外の研究者の協力を得て研究班を組織し、それぞれ新しい角度から問題を提起し、それについて実証的かつ理論的に検討を行っている。

環ベンガル湾地域における文化・文明の交錯

加納 啓良	東南アジアの植民地支配と社会経済構造
高橋 昭雄	市場経済体制移行下のミャンマー農村経済
柳澤 悠	近現代インドの経済構造
中里 成章	インドにおける植民地支配体制と社会構造
井坂 理穂	植民地期のインドの政治と社会
上村 勝彦	古代インドの文学と社会
永ノ尾信悟	古代インド社会と祭式

西アジア部門

鈴木 董	長澤 榮治	松谷 敏雄 (97年3月まで)	羽田 正
山中由里子 (98年2月まで)	後藤 明	鎌田 繁	森本 一夫
Werner, Christoph (97年3月まで)	小泉 龍人 (98年3月まで)	菊地 達也 (98年4月から)	

西アジア部門は、アフガニスタンからトルコ・エジプトまでの地域、いわゆる中近東を研究対象とし、あわせて内陸アジアをも対象のなかに包含する。この広大な地域の政治、経済、文化、社会を、学際的研究によって総合的に理解し、その特質を解明することが本部門の目的である。そのために各自が独自の立場から個人研究を行うとともに、「西アジア文化の歴史的形成と現代的課題」を共通の研究題目とする共同研究が実施されている。

西アジア文化の歴史的形成と現代的課題

鈴木 董	オスマン帝国の政治社会史的研究
長澤 榮治	近現代アラブの社会経済史研究
松谷 敏雄	北シリアにおける農耕・牧畜の起源について
羽田 正	イラン・イスラム社会の特徴
山中由里子	西アジアにおける英雄物語の比較研究
後藤 明	初期イスラム社会史
鎌田 繁	イスラム神秘思想の構造と展開
森本 一夫	イスラム世界における聖性の研究
Werner, Christoph	イラン都市の諸相：タブリーズ 1747-1848
小泉 龍人	西アジア先史時代の社会構造
菊地 達也	ファーティマ朝思想

研究交流部門

1997年度より、現在本研究所がカバーしきれていない地域ならびに専門分野での研究を進める目的で、最大限3年をめやすとして国内外から適任の研究者を招聘することにした。

Timur Beisembiev (予定)

B 長期国際共同研究

中国社会の変動が及ぼすアジア諸国への影響の研究

香港大学アジア研究センターと共同で、5年間にわたり、香港研究プロジェクトならびにアジア研究ネットワーク形成プロジェクトとして進められている。

(○は研究担当者、*は学外の研究協力者)

委員長 濱下 武志

宮脇 博史	平勢 隆郎	高見澤 磨 <small>(97年4月から)</small>	吉開 将人
*青木 敦	*黨 武彦	黒田 明伸	*弘末 雅士
*金 鳳 珍	*Christian A. Daniels	*菅谷 成子	*飯島 渉
○谷垣真理子	蜂屋 邦夫	尾崎 文昭	小川 裕充
丘山 新	*笠井 直美	加納 啓良	高橋 昭雄
*重松 伸司	鈴木 董	末成 道男 <small>(98年3月まで)</small>	岡本 サエ
原 洋之介	田中 明彦	原田 至郎	*廖 赤 陽

激動するイスラーム圏の政治・社会構造の変容過程の研究

1996年度は、国立民族学博物館地域研究企画交流センターの連携研究「西アジアの重層的研究」、97年度は、同センターの連携研究「西アジアの政治経済文化変容」の一環として行われた。

委員長 鈴木 董

平勢 隆郎 *黨 武彦 丘山 新 上村 勝彦

柳澤 悠	加納 啓良	永ノ尾信悟	小倉 泰
後藤 明	鎌田 繁	羽田 正	長澤 榮治
* 山中由里子	森本 一夫	* 小泉 龍人 (98年4月から)	* 清水 和裕 (98年4月から)
* 松原 正毅	* 小杉 泰	* 木村 喜博	* 黒田 卓
* 柳橋 博之	* 臼杵 陽	* Modjtaba Sadria	* 中田 考
* 菊地 達也 (98年4月から)	原 洋之介	関本 照夫	松井 健
Timur Beisembiev (98年4月から)			

環ベンガル湾地域における社会・経済・文化の交錯と変動

ベンガル湾を取り巻く南アジアから東南アジアにかけての一带を、独自の連関をもつ地域としてとらえ、地域内の社会・経済・文化の交錯と変動を考察する。

委員長 加納 啓良

高橋 昭雄	柳澤 悠	中里 成章	井坂 理穂
上村 勝彦	永ノ尾信吾	* 川島 耕司	* 斉藤 照子
原 洋之介	猪口 孝	田中 明彦	原田 至郎
松井 健	末成 道男 (98年3月まで)	関本 照夫	岡本 サエ
小倉 泰 (98年4月から)	池本 幸生 (98年4月から)		

C 班研究

各専門分野の研究を推進し所外の研究者との交流を深めるため、所員を主任とする班研究会が特定のテーマごとに数多く設置されている。所外の参加者には東京大学の他部局に属する「研究担当者」と、その他の教育・研究機関に属する「研究協力者」の双方が含まれる。1997、1998両年度における班研究会の組織状況は、次のとおりである。(○は研究担当者、*は研究協力者。途中で所属先の変わった者については、変更後の所属先にもとづいて分類。)

外から見たベトナム社会 主任 末成 (1997年度で終了)

ベトナムの社会・文化は、中国だけでなく韓国や日本あるいは東南アジア諸国と構造的に類似する点が少なくない。本格的な現地調査が最近まで不可能であったため、人類学的研究が著しく立ち遅れている。このような状況をふまえ、現在利用できる資料を用いて、多面的な視角をもってベトナムの特性の解明を試みる。

末成 道男 * Shaun K. Malarney * 嶋尾 稔 * 中西 裕二
* 嶋 陸奥彦 * 笠井 直美 * 瀬川 昌久 * 片山 剛
* 武内 房司 * 菊池 秀明 * 横山 廣子 吉開 将人
* 板垣 明美 * 田村 克己

アジアにおける地域工芸産業の研究 主任 関本

アジア各地における染・織その他の地場工芸産業の幾つかの代表的事例を、文化人類学、経済学、美術工芸の視点を合わせて研究し、その現状、歴史的背景、今後の発展の可能性を知ろうとするものである。

関本 照夫 松井 健 高橋 昭雄 池本 幸生
○山下 晋司 * 小笠原小枝 * 塩田 光喜 * 伊藤ふさ美
* 林 行夫 * 中谷 文美 * 水野 広祐

「自然」観の通文化的研究 主任 松井

自然は人間生活の外部環境として、生業の対象となったり、文化表象に用いられるばかりではなく、ときとして、人間の想像力や表現芸術の創造性を励起するものとなり、文化のまっただなかに姿をあらわす。自然をめぐる文化的プラクシスの多様性を通して、人類学的課題としての「自然」の位置を探ることを目指す。

松井 健 * 松田 清 * 菅 豊 * 小長谷有紀
* 竹川 大介 * 須藤 健一 永ノ尾信悟 * 松原 正毅
* 篠原 徹 * 太田 至 * 栗田 和明 * 掛谷 誠
* 武田 淳 * 菅原 和孝 * 宮岡 伯人 * 山本 紀夫
* 西谷 大 * 窪田 幸子 * 高倉 浩樹
(98年度から) (98年度から) (98年度から)

構造調整下のアジア経済の展望 主任 原

アジア地域全体で展開されている経済の構造調整政策ならびに市場経済への移行について、その成果・問題点を比較の視点から解明している。

原 洋之介 池本 幸生 * 杉本 義行 * 今岡日出紀
(98年度から)
○ 藤田 夏樹 * 新谷 正彦 ○ 永田 信 * 福井 清一
* 石田 正昭 * 本台 進 ○ 田嶋 俊雄

アジア太平洋諸国における日本外交 主任 猪口 (1998年度から発足)

アジア太平洋諸国は大きな変動を経験している。本研究計画は日本のアジア外交の実証研究を目指すものである。地球政治の枠組み、東アジア地域、東南アジア地域、日米関係などを分担しつつも、全体像を浮かび上がらせるような研究運営を図っていきたい。

猪口 孝 田中 明彦 原田 至郎 ○ 山本 吉宣
○ 山影 進 ○ 石井 明 ○ 古城 佳子

東アジア・東南アジアをめぐる主要国間の国際政治 主任 田中

東アジアの国際政治の分析として、各国の対外政策決定過程を比較分析するための作業を行うとともに、冷戦後の北東アジアをめぐる日米中関係の展開、朝鮮半島情勢の分析を行った。

田中 明彦 ○ 山影 進 * 浅野 亮 ○ 古田 元夫
* 伊豆見 元 * 瀬島 誠 ○ 谷垣真理子 * 河合 弘子
原田 至郎

世界システムの諸類型 主任 田中

世界史上に存在したさまざまな世界システムの特徴を比較分析するための作業を続けている。近代世界システムとヨーロッパ中世の比較、古代中国、イスラム世界、アジア海洋世界などの比較を行った。

田中 明彦 平勢 隆郎 濱下 武志 鈴木 董
上村 勝彦 原田 至郎

比較文化研究の方法 主任 岡本

アジア比較文化基本文献（原典）の解題集をまとめることを目的に、専攻の異なる研究者が協力して取り組んでいる。文献の範囲と分類方針を定め、執筆する予定。

岡本 サエ *加藤 祐三 関本 照夫 *田辺 勝美
*小宮 彰 宮嶋 博史 *西原 大輔 ○佐藤 慎一
○川原 秀城 *吉田 忠 原 洋之介 *清水 学
鈴木 董 鎌田 繁

中国出土文字史料とその歴史的背景 主任 平勢

本研究は、中国古代出土文献史料の重要性が日ましに高まっている現状に鑑み、当該史料の活用をはかり伝存史料との接点を探ることを基礎作業とし、各自のテーマについての討議を進め、問題点を整理する。主として討議の対象としたのは、平勢の進めている戦国紀年整理に関わる問題である。

平勢 隆郎 *竹内 康浩 ○尾形 勇 *窪添 慶文
(98年度から) (97年度まで)
*原 宗子 *影山 輝国 *鶴間 和幸 *工藤 元男
*谷 豊信 *飯尾 秀幸 吉開 将人 *熊谷 滋三

内蒙古出土学術資料の調査研究 主任 後藤

江上波夫名誉教授が戦前に内蒙古で発掘・収集した学術資料を点検し、その学

術的価値を確認して、内外の研究者の利用の便に供することを目的としている。

後藤 明 平勢 隆郎 吉開 将人 ※林 俊雄
※高濱 秀 ※中見 立夫

道家道教思想の総合的研究 主任 蜂屋

主として、後漢から隋唐時代にかけての、道教史および道教思想史、道家思想史について、各方面の専門家に参加してもらって総合的に検討している。

蜂屋 邦夫 ※高橋 忠彦 ※原田 二郎 ※前田 繁樹
○池田 知久 ※中嶋 隆蔵 ※松岡 栄志 丘山 新
○末木文美士 ※菅野 博史 ※末岡 実 ※吉田 純
※藤本 幸夫

東アジアにおける仏教経典の受容 主任 丘山

中国各分野の研究者の協力を得て、中国初期禅宗史書である『祖堂集』の会読を進めている。併せて訳注の制作も準備中。

丘山 新 ※神塚 淑子 ※河野 訓 ※小川 隆
※岩松 浅夫 (97年度まで) ※辛嶋 静志 (97年度まで) ※衣川 賢次 (98年度から) ※松原 朗 (98年度から)
※土屋 昌明 (98年度から) ※石井 修道 (98年度から) ※石井 清純 (98年度から) ※館野 正美 (98年度から)
○下田 正弘 鈴木 隆泰 ※前川 亨

1980-90年代中国の思想・文化・学術 主任 尾崎

中国の1980-90年代は、文化全般の大変革期であったが、その構造的変革の様相とその意味をとらえるべく、思想・文学・社会史学・法学などの各分野の研究者によりイデオロギー分析などの方法による研究を進める。

尾崎 文昭 丘山 新 (98年度から) 巖 鋒 (98年度から) 高見澤 磨
※上田 望 ○大木 康 ○大西 克也 ※笠井 直美
※坂井 洋史 ※坂元ひろ子 ※砂山 幸雄 ○戸倉 英美
※廣瀬 玲子 ○村田雄二郎

中国一九三〇年代の文学 主任 尾崎

1930年代を中心としつつ、広く中国現代文学の実証的な研究を目的とし、雑誌『現代』の輪読を軸に研究報告会、合宿を行う。また、世界の同分野の研究者との研究交流も積極的に行う。

尾崎 文昭 丘山 新 * 芦田 肇 ○伊藤 徳也
(97年度まで)
* 大滝 幸子 ○刈間 文俊 * 近藤 龍哉 * 櫻庭ゆみ子
* 佐治 俊彦 * 清水賢一郎 ○代田 智明 ○藤井 省三
* 松岡 俊裕

17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究 主任 濱下

東洋文化研究所が所蔵する仁井田陞博士コレクションの土地契約文書の解読研究から出発した本研究班は、その後東洋学文献センター叢刊などにおいて解題・目録を作成した。その他商業文書、日用文書などを継続的に研究する。

濱下 武志 高見澤 磨 * 青木 敦 * 黨 武彦
○岸本 美緒 * 上田 信 * 寺田 浩明 * 張 士 陽
* 臼井佐知子 * Linda Grove * 久保 亨 宮嶋 博史
○石川 洋 * 川村 康 黒田 明伸
(98年度から)

現存する中国絵画の包括的再検討 主任 小川

本班は、東アジア美術研究室所蔵中国絵画写真資料を維持・拡大するため、世界の公私の中国絵画コレクションの調査撮影を実行する母胎となっており、1997年度までに第二次の包括的調査をほぼ完了した。現在、その成果を承けて、『中国絵画総合図録 続編』を刊行中である。

小川 裕充 * 海老根聡郎 * 嶋田 英誠 * 湊 信幸
* 宮崎 法子 * 藤田 伸也 * 救仁郷秀明 * 井手誠之輔
* 板倉 聖哲 * 林 秀 薇

朝鮮伝統社会の構造とその変容——方法論的探究 主任 宮嶋

近現代の朝鮮社会の個性的展開を、伝統社会の構造とその変容という視点から把握することを目指している。

宮嶋 博史 ○吉田 光男 ○小川 晴久 *山内 弘一
*吉野 誠 *趙 景 達 *月脚 達彦 *康 成 銀
*尹 健 次 *並木 真人

植民地期南アジア像の再検討——経済と政治 主任 柳澤

植民地期の南アジアの経済と政治に関する過去20年間の研究の進展は目ざましく、従来の認識を大幅に変更するものとなっている。人口史・飢饉史や環境史などの研究も急速に進展してきた。本研究会は、これらの新たな研究動向の展開を整理して、植民地期の政治経済像の再構成を追求する。

柳澤 悠 ○水島 司 *粟屋 利江 井坂 理穂
*山本由美子 *竹中 千春 *佐藤 宏 *脇村 孝平
*杉野 実
(98年度から)

南アジアにおける経済発展と国民形成（1930年～1990年）主任 中里

最近のインド経済自由化への急激な動きは、南アジアの経済と政治がかつてない転換期に立たされていることを示している。本班研究は、独立前の模索の段階を経て、独立後独特のかたちで発展を遂げた南アジアの国民経済と国民国家のシステムにいかなる問題があったのか、今日の視点から検討を加える。

中里 成章 *絵所 秀紀 *押川 文子 *黒崎 卓
*近藤 則夫 ○長崎 暢子 *藤井 毅 ○藤田 幸一
(97年度まで)
*脇村 孝平

インド古代叙事詩の研究 主任 上村

ヒンドゥー教を研究する上で最も基本的な資料である二大叙事詩『マハーバー

ラタ』や『ラーマーヤナ』を中心に、古代インドから近代インドに至るまでのインドの思想、宗教、文化を通観することを目的とする。そのために、ヴェーダ、仏教、法典、美術建築、宗教儀礼、ヒンディー文学の研究者の協力を得る。

上村 勝彦 永ノ尾信悟 小倉 泰 ○土田龍太郎

*高橋 孝信 ○入山 淳子 *羽矢 辰夫 *松原 光法
(98年度から) (97年度まで)

*渡瀬 信之 *金 漢 益 *戸田 裕久 *水野 善文
(98年度から)

南アジアとイスラーム 主任 永ノ尾

パキスタンとバングラデシュをふくむ南アジアはイスラーム教徒が最も多い地域である。13世紀以降に本格的に接触をはじめたイスラーム文化は南アジアの文化に多大な影響を与えた。13世紀以降の南アジアにおけるイスラーム文化とヒンドゥー文化の接触、変容の過程をさまざまな視点から分析していく。

永ノ尾信悟 *石井 溥 鎌田 繁 *関根 康正

中里 成章 羽田 正 松井 健 柳澤 悠

*山下 博司

東南アジア近現代史像の再検討 主任 加納

欧米植民地支配のもとでの変容、独立後の国民国家形成、インドシナ、ビルマにおける社会主義の実験、ASEAN諸国を中心とする経済発展などを経て東南アジアの社会は大きく変わる一方、1997年からの金融危機はその弱点をも示し始めている。こうした経過を踏まえ、この地域の近現代史像の再構成を試みる。

加納 啓良 *浅見 靖仁 *小泉 順子 ○桜井由躬雄

*白石 昌也 ○末廣 昭 高橋 昭雄 *土佐 弘之

○中西 徹 ○藤原 婦一 ○古田 元夫

アジア都市比較の課題と方法 主任 鈴木

アジア諸地域の都市の特質について、アジア専門家とアジア以外の地域の専門家の協力により、解明を加えることをめざし、研究会を持つこととしている。

鈴木 董 * 陣内 秀信 松井 健 * 妹尾 達彦
○大木 康 * 清水 展 小倉 泰 羽田 正
* 坂本 勉 * 林 佳世子 * 黒木 英充 ○本村 凌二

近代アジア社会研究の方法的課題 主任 濱下

班員が研究対象とするアジア諸地域社会をその内的構成において検討すること、またそれらの近代という問題へのかかわり方を様々な角度から討論し、さらに地域間で比較検討を行い、アジア社会研究の方法的課題を明らかにする。

濱下 武志 宮嶋 博史 柳澤 悠 鈴木 董
加納 啓良 原 洋之介 中里 成章

ジャーヒリーヤからイスラームへ 主任 後藤

内外の研究者を招いての研究会での発表などを通して、中東地域におけるイスラーム以前からイスラーム後の時代への変化を、政治、経済、社会、思想、文学など多様な側面から検討する。

後藤 明 ○ 薮 勇造 * 花田 宇秋 * 佐々木淑子

比較イスラム制度史の研究 主任 鈴木

前近代イスラム世界の諸制度の形成・伝播・発展について、政治制度を中心に比較史的検討を行うことをめざしている。

鈴木 董 * 花田 宇秋 ○ 佐藤 次高 * 三浦 徹
* 私市 正年 * 林 佳世子 羽田 正

都市社会と宗教施設 主任 羽田

イスラム世界の都市においては、モスク、マドラサ、聖廟などの宗教施設が社会的に重要な意味を持っている。本班研究では、イスラム世界内外の都市史や建

築史の専門家の共同討議によって、これら宗教施設の社会的機能を解明することを目的にしている。

羽田 正 ○藤井 恵介 小倉 泰 *私市 正年
○小松 久男 *Sadria Modjtaba *林 佳世子 *三浦 徹
*山中由里子 森本 一夫 *深見奈緒子
(98年度から)

欧文ペルシア旅行記の研究 主任 羽田

15世紀以来数多く記されてきた欧文によるペルシア旅行記に関する情報を集積し、その特徴を文献学的に解明するとともに、その記述を多角的に利用して、イラン社会の特徴やヨーロッパ社会とイスラム社会の相違などの問題を明らかにすることを旨とする。

羽田 正 *近藤 信彰 ○山岸 智子 *山中由里子
○山口 昭彦
(98年度から)

中東の社会変容と思想運動 主任 長澤

東アラブを中心として、近代以降の中東の社会経済変容と政治社会思想の展開の相互の関係を、各地域の事例研究に依拠して比較考察する。

長澤 榮治 *臼杵 陽 *岡野内 正 *加藤 博
*栗田 禎子 *福田 安志 *松本 弘

イスラム史料の総合的研究 主任 鈴木

イスラム圏の諸史料の史料学的検討をめざし、現在は、オスマン語史料につき、オスマン史以外の専門家も含めて、史料講読会をもち、史料学的検討を進めている。

鈴木 董 *坂本 勉 *八尾師 誠 羽田 正
*林 佳世子 *黒木 英充 *加藤 博 *私市 正年
*三沢 伸生

本研究所にはアラビア語を中心とする写本集成である「ダイバー・コレクション」が所蔵されているが、これら原資料やマイクロフィルムの資料を活用して、イスラームの幅広い思想を研究者のさまざまな関心に基づいて研究を進めることを目的としている。その一環として定期的に写本資料の購読を行っている。

鎌田 繁 後藤 明 * 小林 春夫 ○ 佐藤 次高
○ 杉田 英明 ○ 竹下 政孝 * 東長 靖 * 中田 考
* 野元 晋 * 藤井 守男 * 菊地 達也
(98年度から)

附属東洋学文献センター

アジア研究とコンピュータ 主任 岡本

97年度の「データベース作成とネットワーク」班を発展させ、データベース作成やネットワーク化を中心に、アジア研究におけるコンピュータ利用とその可能性を探る。実務に携わっている研究者が方法論を討論し、『東洋文化』79号に特集を組む。

岡本 サエ ○ 大木 康 * 大塚 秀高 丘山 新
小倉 泰 加納 啓良 * 官 寧 鈴木 隆泰
田中 明彦 羽田 正 原田 至郎 * 檜垣 泰彦
* 山田 直子

D 定例研究会

本研究所では、毎年5～6回の頻度で、研究所スタッフ全員の参加する定例研究会を開催している。5つの研究部門の各々が輪番制により毎年1回、部門構成員のいずれか1名の研究報告をこの研究会で行うのが慣例となっている。また毎年度末には、定年退官する教官の最終研究発表会を催している。過去2年間の開催状況は次のとおりである。

1996年度

開催月日	担当部門	報告者	研究発表論題
6月13日	南アジア	高橋 昭雄	ミャンマーの市場経済化と農業政策
7月11日	西アジア	森本 一夫	サイドとその血統——中世イスラーム世界におけるカリスマの社会統制
9月12日	東アジア2	尾崎 文昭	九十年代中国の知識人
10月17日	汎アジア	原田 至郎	戦争と平和——近代と現代、世界とアジア
11月14日	環ベンガル湾プロジェクト	加納 啓良	比較農業史から見た環ベンガル湾研究の課題

1996年度退官記念最終発表研究会

3月6日	松谷 敏雄	ティグリスからユーフラテスへ
	丸尾 常喜	魯迅の散文詩「死後」(『野草』)を読む

1997年度

開催月日	担当部門	報告者	研究発表論題
6月26日	東アジア1	高見澤 磨	中国近代法史の試み
7月10日	東アジア2	鈴木 隆泰	『金光明経』と『大雲経』
10月16日	東アジアプロジェクト	濱下 武志	香港返還と東アジア
11月6日	東アジア1	黒田 明伸	貨幣史の素描
12月11日	西アジアプロジェクト	小泉 龍人	古代の土器づくり——北シリアにおける最新発掘成果

1997年度退官記念最終発表研究会

3月5日	末成 道男	東アジア研究におけるベトナム——人類学的調査の意味
------	-------	---------------------------

E 学術研究・調査

1. 特別事業費等による海外現地研究

岡本サエ（1997. 3. 14～3. 27）：特別事業費

フランス、香港の研究機関を訪問し、明清思想研究のための調査と、出版打ち合わせを行った。

丘山 新（1997. 3. 17～4. 7）：特別事業費

中華人民共和国、香港、台湾を訪問し、漢籍データベース化に関する意見交換を行った。

後藤 明（1997. 3. 20～4. 17）：特別事業費

西アジア諸国（トルコ、エジプト、スーダン、イラン）を訪問し、イスラーム運動の現状調査を行った。

原田至郎（1997. 3. 29～4. 4）：特別事業費

香港、シンガポールを訪問し、香港返還による東アジア社会への影響に関する調査を行った。

未成道男（1998. 1. 4～1. 11, 2. 1～2. 12）：特別事業費

ベトナム、ハノイ市近郊村落を訪問し、ベトナム村落の祭祀における年齢階梯的特徴の研究のための調査を行った。

田中明彦（1998. 2. 28～3. 9）：特別事業費

ウズベキスタン、ロシアを訪問し、現代中央アジアの国際政治の調査を行った。

永ノ尾信悟（1998. 3. 15～4. 24）：特別事業費

3月15日から4月23日までバトナ近郊で、ビハール州北部のヒンドゥー教およびイスラーム教の宗教行事の口頭伝承および文献資料の調査を行った。

吉開将人（1998. 3. 29～4. 12）：特別事業費

ベトナム考古学院の受入れにより、ベトナム歴史博物館などの諸機関において

銅鼓と金文資料の調査を進め、香港では文献資料を収集した。

平勢隆郎（1997. 12. 28～12. 31）：リーダーシップ支援経費

台湾を訪問し、台湾の研究者との交流拡大の可能性に関する調査を行った。

羽田 正（1998. 1. 24～2. 8）：リーダーシップ支援経費

英国ケンブリッジ大学、オクスフォード大学、インド省記録図書館などで、シャルダンの個人史を再構成するための資料収集を行った。

中里成章（1998. 3. 8～3. 23）：リーダーシップ支援経費

ロンドンの旧インド省図書館において、第2次大戦中のインド戦時経済に関する史料を調査した。

原洋之介（1998. 3. 15～3. 22）：リーダーシップ支援経費

タイではチュラロンコーン大学経済学部、タイ開発研究所、シンガポールでは東南アジア研究所を訪問し、経済関係の研究の交流について議論した。

猪口 孝（1998. 3. 18～3. 22）：リーダーシップ支援経費

米国国際政治学会で「米国の民主主義推進」についての論文発表を行った。

丘山 新（1998. 3. 21～3. 29）：リーダーシップ支援経費

米国を訪問し、国際博物館資訊交換標準会議の打ち合わせを行った。

小川裕充（1998. 3. 23～4. 5）：リーダーシップ支援経費

ニューヨーク、グッゲンハイム美術館で開催中の中華人民共和国所蔵名品展に赴き、同展出品の中国絵画の調査を行った。

宮嶋博史（1998. 3. 25～3. 30）：リーダーシップ支援経費

韓国の国史編纂委員会、韓国精神文化研究院を訪問し、韓国諸機関との学術交流の可能性の調査を行った。

加納啓良（1997. 3. 8～ 3. 14）、長澤榮治（1997. 3. 8～3. 14）、栗林久美子（1997.

3. 8～3. 14）：海外学術交流拠点設置・運営経費

シンガポールを訪問し、海外学術交流拠点設置・運営のための調査を行った。

黒田明伸 (1998. 3. 16~3. 21), 尾崎文昭 (1998. 3. 13~ 3. 19), 加納啓良 (1998. 3. 16~3. 22), 後藤 明 (1998. 3. 16~3. 20), 金子俊明 (1998. 3. 16~3. 20) : 海外学術交流拠点設置・運営経費

本研究所のシンガポール海外研究拠点を置いているシンガポール大学芸術学部を訪問し、責任者及び関係者と学術協力について討議し、必要な調査を行った。

丘山 新 (1997. 10. 27~11. 1) : 国際交流協定推進経費

中華人民共和国を訪問し、資料収集とオンライン化の打ち合わせを行った。

2. 特定研究経費による研究・調査

蜂屋邦夫「中国道仏人物に関する資料収集と検索システムの作成」

中国道教・仏教の人物研究については儒教のそれに及ばない。特に道教については著しく遅れている。本研究は古今の膨大な中国文献から道仏二教の人物資料を抽出整理し、検索システムを作成する。

1996年度 582.7万円 1997年度 277.5万円

小川裕充「『中国絵画総合図録 改訂増補版』編集と同図録画像データベース作成作業」

本計画は、無慮20万点に及ぶ東アジア美術研究室所蔵中国絵画写真資料の画像データベース化のための基本カードの作成を目的とし、96年度でほぼ完了した。

1996年度 545.7万円

3. 文部省科学研究費による研究・調査

原洋之介「地域発展の固有論理」: 重点領域研究(1)

東南アジア地域に焦点をあてつつ、各国・地域での市場経済発展の展開にみられる、普遍性と地域性とを明らかにする。

1996年度 790万円

濱下武志「琉球をめぐる日本・南海の地域間交流史」: 重点領域研究(1), (2)

琉球の三山統一以前から幕末維新期までの琉球・日本交流史及び琉球・南海交流史を、環東シナ海の地域間交流の一環として、位置づけなおすための実証的

歴史研究を行い、それに関する歴史史料情報を蓄積することを目的とする。

(1) 1996年度 680万円 (2) 1997年度 600万円

宮嶋博史「地域性の形成における人口・環境要因の作用」：重点領域研究(1)

アジアにおいて人口稠密地域に属する東アジア・南アジアの地域性形成を、特に東南アジアと比較することにより、その特徴を把握することを目指した。

1996年度 210万円

田中明彦「政治テキストの内容分析システムの構築」：基盤研究(A)

政治テキストの内容をシステムティックに分析するためのコンピュータ・ソフトウェア「Content Analyzer」の開発。概念の検索、頻度検索、主成分分析、クラスター分析などを可能にするもの。

1996年度 270万円 1997年度 180万円

田中明彦「アジア・太平洋諸国の対外政策形成・実行過程の研究」：基盤研究(A)

アジア・太平洋諸国の対外政策の決定・実行過程を分析するための基礎作業を行っている。97年度は、各国の精度調査を行うとともに、専門家や実務家からのヒアリング・ブレインストーミングを行い、問題点の抽出につとめた。

1997年度 850万円

蜂屋邦夫「道教内丹学の形成と展開についての語彙および図像論的研究」：基盤研究(B)

『悟真篇』など時代性のはっきりしている道家内丹資料から語彙を抽出し、それを基準にして多くの文献間の関係を解明し、内丹の歴史とその特質を明らかにする。それに図像研究を組み合わせ、内丹術の形成と伝承を明らかにする。

1996年度 120万円 1997年度 80万円

加納啓良「風土と物産から見た環ベンガル湾世界の社会経済史的研究」：基盤研究(B)

南アジアから東アジアにまたがる「環ベンガル湾世界」の近・現代社会経済史について、「風土と物産」「土地制度と農業変化」「交通・商業・金融のリンケージ」などの主題を中心とするデータ収集と比較研究に着手した。

1997年度 380万円

長澤榮治「西アジア・データベース形成のための基礎研究」: 基盤研究(B)

アラビア・ペルシア・トルコ語文献などを中心に西アジアに関する人文科学系の研究資料のデータ・ベースを構築するために、基礎資料の集積と整理、機械入力に係る基盤整備のための基礎的研究を行う。

1997年度 490万円

高橋昭雄「市場経済体制移行下のミャンマー農村の変容に関する社会経済的研究」:
萌芽的研究

高橋自身が調査したミャンマーの農村5カ村の世帯別経済調査表をエクセルのワークシートに入力してデータベース化した。これを基に市場経済化の中で村と村人たちの社会生活がどのように変化しているのかについて研究を進めた。

1997年度 140万円

鈴木隆泰「Stop Palace 写本と Tokyo 写本を用いたチベット典籍の史的系統調査」:
奨励研究(A)

Stop Palace, Tokyo 両写本を対象に、異読を比較校合することによって両者の歴史的・文献的距離を測定し、チベット大蔵経の critical edition 確定のための基礎資料を作成する。

1997年度 180万円

松井 健「インド亜大陸における宗教・民族紛争の生成と回避のメカニズムの人類学的研究(第三次)」:
国際学術研究(学術調査)

典型的な多民族・多言語地域であり、宗教的にも大きな変異のみられるインド亜大陸の、過去の宗教・民族紛争の生成と回避の事例を分析すると同時に、平静時の社会状況と対比して、宗教・民族紛争に関与する社会要因の同定に努める。

1996年度 710万円

末成道男「周辺からみた中国の変動過程に関する人類学的研究」:
国際学術研究(学術調査)

中国文明は、古来周辺の文化要素を吸収し、自らの理想型を形成してきた。中国および周辺地域での最近の経済成長や社会変動が、これら文化社会に対しどのような影響を与えているかを観察し、中華文明の本質の動的な究明をめざす。

1996年度 530万円

関本照夫「経済発展下の文化創造－東南アジア地域工芸産業の現代的発展の総合的研究」：国際学術研究（学術調査）

東南アジア4カ国（インドネシア、ミャンマー、タイ、ラオス）における染・織その他の地場工芸産業の幾つかの代表的事例について、現状、歴史的背景、今後の発展の可能性を、文化人類学、経済学、美術工芸の視点を合わせて現地調査。

1997年度 930万円

中里成章「南アジアにおける国民統合と政治・経済システムの形成－変革の90年代からの再検討」：国際学術研究（学術調査）

南アジア諸国は現在変換期にあり、その激動の中で国民国家形成期に創出された制度や価値観が厳しく問い直されている。本調査研究はこうした現状を踏まえて、南アジアの政治・経済システムの形成過程を再検討することを目的とする。

1996年度 830万円 1997年度 880万円

松谷敏雄「シリア先史遺跡調査」：国際学術研究（学術調査）

1994・95年に引き続き、シリアのテル・コサック・シャマリ遺跡で発掘を行った。96年の調査の最大の収穫は、A区のCビルと名づけられたウバイト期の焼失した建物の発見である。この一室からは、100点以上完形の土器が出土した。

1996年度 670万円

宮崎博史「東アジア（朝鮮・中国・日本）近世社会の比較研究」：国際学術研究（共同研究）

李朝朝鮮、明清期の中国を近世日本と比較することを目指して、日本・韓国の研究者15名の共同研究を行った。

1996年度 170万円 1997年度 80万円

田中明彦「日本議会演説データベース」：研究成果公開促進費

日本の国会で行われた総理大臣、外務大臣、大蔵大臣、経済企画庁長官の演説、国会外で行われた総理大臣の演説の全文テキストをデータベース化し、インターネット上で公開すること。

1996年度 288万円、1997年度 288万円

濱下武志「現代中国書データベース」：研究成果公開促進費

東洋文化研究所が刊行した『東京大学東洋文化研究所現代中国書分類目録』を責任編集。

1997年度380万円

後藤 明「現代イスラーム世界の動態的研究－イスラーム世界理解のための情報システムの構築と情報の蓄積」研究班5「イスラームの歴史と文化」：創成的基礎研究費

「歴史学者と人類学者の共同作業」を目指して、「生活の中のイスラーム」を研究するaグループと、「歴史の中のイスラーム」を研究するbグループを組織している。1997年度は、「問題発見の年」とした。

1997年度1,000万円

「南アジア世界の構造変動とネットワーク－多元的共生社会の発展モデルを求めて」領域代表 長崎暢子：特定領域研究(A)：東洋文化研究所南アジア部門が事務局を担当

南アジアに現在生じている構造変動を、計画と市場、国民国家システム、環境、生活世界、ジェンダーの視点から、重層的なネットワークの中で構造的に分析し、多元的共生社会の発展モデルの可能性を探る。

1998年度2,875万円

中里成章「南アジアの経済発展における計画と市場」：特定領域研究(A)：計画研究

1991年にインド政府が経済自由化政策に踏み切って以来、南アジアでは大きな経済変動が起きている。本計画は政府による計画＝公的介入と自由な市場経済の関係を軸に据えて、この変動の根底にある構造的要因を分析する。

1998年度870万円

柳澤 悠「南アジアにおける環境変動と開発」：特定領域研究(A)：計画研究

南アジアにおける環境変動と開発の関係を、農業生産とそれに密接に関連する牧畜、人口変動や衛生、都市居住環境、住民運動などに焦点をあてて、村落共同体の変化など農村社会の歴史的変動の視点を踏まえつつ分析する。

1998年度870万円

永ノ尾信悟「ヒンドゥー儀礼の伝承と現状」：特定領域研究(A)：公募研究

ヒンドゥー教儀礼に関するヒンドゥー儀礼文献の記述を分析し、またインドのイスラーム宗教文献などにおけるヒンドゥー儀礼への言及を収集、分析し、南アジアにおけるヒンドゥー教とイスラーム教の関係を明らかにすることをめざす。

1998年度 120万円

4. その他の経費による研究・調査

末成道男「台湾原住民研究」：順益台湾原住民博物館 林迺翁文教基金会

研究会方式で、日本における既往の台湾原住民研究を整理すると共に、現地調査を行い、その公刊を通じて広い意味での現地還元をはかっている。

1996年度 1,000万円 1997年度 1,000万円

関本照夫「経済発展と文化創造－東南アジア地域工芸産業の総合的・国際共同研究」：トヨタ財団

東南アジア4カ国（インドネシア、ミャンマー、タイ、ラオス）における染・織その他の地場工芸産業の幾つかの代表的事例について、現状、歴史的背景、今後の発展の可能性を、文化人類学、経済学、美術工芸の視点を合わせて現地調査。

1996年度 214万円 1997年度 416万円

濱下武志「香港返還：1997年」：平和中島財団

本研究は、香港、中国のみならず、東南アジア諸国を視野に入れて、返還を跨ぐ香港の政治・経済・社会の変化と連続を、(1)住民の政治意識、(2)経済環境、(3)社会環境の3つの分野で検討する。

1997年度 109万円

吉開将人「ヘーガーⅡ式銅鼓に関する国際共同調査と分析研究」：鹿島財団

中華人民共和国の広西壮族自治区博物館との間で進めている。ヘーガーⅡ式銅鼓に関する共同調査・研究・報告プロジェクト。

1996年度 130万円

F 国際・国内学術交流

1. 交流協定

タイ国・カセサート大学経済経営学部との学術交流協定

1995年3月に、当研究所はタイ国カセサート大学経済経営学部との間で、学術交流協定を結んだ。過去20年程度、当研究所の東南アジア経済研究者はタイ国で経済・農村調査研究を実施するに際してカセサート大学に協力をしてもらってきた。また、カセサート大学の研究者が日本など東アジアの研究をするに際して当研究所は彼等を外国人研究者として受け入れてきた。こういう経験を前提として、学術交流協定を結んだ。

5カ年を期限として、当研究所のタイ研究とカセサート大学の日本研究とを促進させる目的で、研究者の相互交流を中心として協定を運営している。さらに、最初の5カ年の成果をふまえて、交流協定の更新を行うことも計画している。

香港大学アジア研究センターとの学術交流協定

本研究所が交流拠点の役割を果し、東京大学の海外学術研究拠点を強化する一環として、1995年10月本研究所は香港大学アジア研究センターとの間に交流協定を結び、共同研究を開始した。協定の内容は、(1)共同研究の推進、(2)研究者の交流、(3)資料・研究情報の交換の三項からなる。

(1) アジア研究ネットワークの形成、(2) アジア研究情報センター設立プロジェクト、(3) 珠江デルタ、新界、香港の社会変化の比較研究、(4) 中国の経済発展と企業家、(5) 香港社会史、(6) 香港の選挙制度と政治意識の変化などがあり、それぞれに、資料調査、現地研究、国際ワークショップなどが進められている。

中国・復旦大学との学術交流協定

東京大学と復旦大学との間における学術交流協定は、1991年10月に結ばれた。この協定の運用は、東京大学では、これまで理学部が担当部局であったが、1996年に更新期限となり、その後東洋文化研究所が担当することとなった。交流の内

容は両校間における(1)教官, 研究者, 院生, 学生の交流, (2)共同研究の計画と実施, (3)講義とセミナーの実施, (4)学術情報及び学術刊行物の交換などである。

東洋文化研究所では, すでに, 個々の共同プロジェクトで復旦大学と研究交流を進めてきたが, 今後, 大学間交流を担当するに際し, より多角的・総合的な交流を進めていきたい。

シンガポール国立大学社会学部

1997年4月に, シンガポール国立大学社会学部と5ヵ年間の学術交流協定を結んだ。この協定は, 研究者の交流と研究資料の相互交換を主要な目的とする。

特に, この協定は, 香港大学アジア研究センターの協定と同様に, 当研究所の長期計画研究「環ベンガル湾」を効果的に行っていくために, 非常に重要な役割を果たすものとして位置づけられている。主としてインド世界と東南アジアとの関連に焦点をあて, 経済, 政治面での交流だけでなく, 思想・文化の相互連関についての研究を進めている。

2. 外国出張（1996・97年度）

研究所スタッフの外国出張の件数は、1996年度76件、1997年度86件であった。国別・期間別の数字は以下の通りである。

一か月以上		一か月未満			
国名	人数	国名	人数	国名	人数
イギリス	6人	大韓民国	22人	イラン	2人
インド	6人	中華人民共和国	22人	ウズベキスタン共和国	2人
中華人民共和国	4人	香港	18人	カナダ	2人
シリア	2人	シンガポール	14人	モロッコ	2人
パキスタン	2人	アメリカ合衆国	14人	ラオス	2人
ベトナム	2人	インドネシア	12人	インド	1人
イエメン	1人	台湾	9人	シリア	1人
イラン	1人	ベトナム	9人	スーダン	1人
インドネシア	1人	イギリス	7人	スイス	1人
エチオピア	1人	オーストラリア	5人	スウェーデン	1人
オマーン	1人	フランス	5人	スペイン	1人
ケニア	1人	エジプト	4人	バングラデシュ	1人
ドイツ	1人	タイ	4人	マカオ	1人
トルコ	1人	ドイツ	4人	マレーシア	1人
香港	1人	トルコ	3人	ミャンマー	1人
ミャンマー	1人	フィリピン	3人	ロシア連邦	1人